

2025年4月27日（日）復活節第2主日礼拝

銀座教会・新島教会 家庭礼拝

礼拝招詞 「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。

銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め、価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。

なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば良いものを食べることができる。

あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。」（イザヤ書55章1～3節）

主の祈り

交読詩編 詩編30編2～6節

主よ、あなたをあがめます。

あなたは敵を喜ばせることなく

わたしを引き上げてくださいました。

わたしの神、主よ、叫び求めるわたしを

あなたは癒してくださいました。

主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ

墓穴に下ることを免れさせ

わたしに命を得させてくださいました。

主の慈しみに生きる人々よ

主に賛美の歌をうたい

聖なる御名を唱え、感謝をささげよ。

ひととき、お怒りになっても

命を得させることを御旨としてくださる。

泣きながら夜を過ごす人にも

喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

使徒信条

讃美歌 30番 あさかぜしずかにふきて 小鳥も目覚むるとき

聖書 ヨハネの黙示録22章12～21節

12 見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる。

13 わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。

14 命の木に対する権利を与えられ、門を通して都に入れるように、自分の衣を洗い清める者は幸いである。15 犬のような者、魔術を使う者、みだらなことをする者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は都の外にいる。

16 わたし、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証した。わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。」17 “霊”と花嫁と言う。「来てください。」これを聞く者も言うがよい、「来てください」と。渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。

18 この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、わたしは証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。19 また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。

20 以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。

牧会祈祷

慈しみと憐れみに富み給う父なる神さま、あなたの御名をあがめます。新しい朝と、新しい朝を生きる新しい命を与えられて、御前に集い、礼拝をおさげできます恵みに感謝いたします。今日もあなたが、私たち一人一人の名を呼んでくださいました。

子なる神よ、私たちは過ぐる主の日にイースターの喜びに与りました。緑豊かな日比谷公園で教会学校の子どもたちと復活日の礼拝を守り、主日礼拝では洗礼式と信仰告白式、転入会式が備えられ、多くの教会の家族を新たにお迎えいたしました。イエスさまが教えてくださったように、子どもたちをこそ神の家族として両手を広げて迎え入れる幼児洗礼の時も与えられましたことを、深く感謝いたします。幼い魂にあなたが語りかけてくださった、その素晴らしさを忘れることなく、教会がこれからも幼な子から高齢の信徒まで、すべての神の家族との豊かな交わりを重んじていくことができますように。病床において洗礼の恵みに与りました姉妹のことも、どうか神さまが御手の内において平安な日々をお恵みください。あなたが再び来てくださる、再臨の時を私たちは心から「マラナ・タ、マラナ・タ」と唱えつつお待ちしています。しかしながら、過ぐる七日の歩みを振り返りますと、聖書の教えを忘れ、隣人への愛に欠けた言葉使いや、行動においての怠りがあったことを思い懺悔いたします。図ると図らざるとに関わらず、御前に罪を犯しました。どうぞ、御赦してください。

聖霊なる神よ、今日、み言葉を通して新たに与えられる霊の糧に感謝いたします。心を柔らかくして、聖なる教えを聞くことができますように、私たちを整え支えてください。死から命へ、絶望から希望へ、どんな苦難においても希望の光を失わない信仰の道にいいよ、ここから進みゆくことが、できますように。家庭で一緒に礼拝を守っている家族や友のことも、御心のままに主の道にお招きください。

姉妹教会の新島教会と共に心を合わせて、きょうも神さまを讃美し祈ります。復活の主、イエス・キリスト御名によってお祈りいたします。アーメン。

説教「初めであり、終わりである神」

副 牧 師 岩田 真紗美

ヨハネの黙示録 22 章 12～21 節

復活節第二の主の日を迎えました。今日は新約聖書の一番最後の書物、『ヨハネの黙示録』の御言葉をご一緒に聞いています。先週は主のご復活、イースターを共々にお祝いしました。復活された主イエスが私たちの所に再び来てくださる「再臨の日」、「終末の時」について、主イエスご自身が語っておられるのがこの『ヨハネの黙示録』です。

「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる。わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。」と主は、言われます。黙示録の「黙示」というのは、そもそも神さま御自身が、御自分のことを諸教会に対して明らかに示される、その内容を指す言葉ですから神さまは今、この聖書正典 66 巻の最後の文書において、御自分がすべての出発点であり、また同時にすべての終着点であることを「花嫁」（黙 22:17）である私たち教会に示されたのだと言えます。

先週漸く復活の喜びを共に味わったところですが、主の昇天日やペンテコステを飛び

超えてどうして今日は『ヨハネの黙示録』に聞くのかと疑問に思われる方がいるかも知れません。しかしそれは、お手元の週報をお開きになると分かるのですが次主日から私たちの教会は『創世記』に始まる旧約聖書の御言葉に聞いてまいりますので、このような順番で福音主義教会連合の先生方が計画を練ってくださったのではないかと察します。来月から銀座教会では大人も子どもも『創世記』に始まる旧約聖書を主日毎にお聞きします。ですからその前に、世界の、と申しますか、この地上だけではなく天上のすべてを含んだ「世」の終わりの「黙示」を、主イエス御自身の口からお聞きすることで、一層旧約聖書が語る天地創造の御業に私たちの信仰の眼が開かれていくことを、聖霊なる神に教会は願うのです。この世の土台を据えられたのが三位一体の神さまであられるならば、その世の終わりの時もまた主の御手によって、神さまがご計画される摂理に基づいて迎えられることになるのです。そこで今日は、ローマ帝国の迫害の中で苦しむ諸教会に対して、天から主イエス・キリストがお与えになった黙示録を、私たちは自分たちの教会に与えられた御言葉として味わいたいと思います。

「わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。」（13 節）とイエスさまは言われます。天地創造の頃に既に、父なる神と聖霊なる神と共におられた子なる神である主イエスは、最初におられて後は人間の思うままに世をお任せになる無責任な神さまではありません。そうではなく、終末の、約束されたその最後の時まで、いつ如何なる時も常に私たち教会と、花婿と花嫁のような愛に溢れた自由な、何にも代えがたい豊かな関係を保ってくださいしています。その関係において主は諸教会と共に手を取り合って、生き生きと生きてくださるのだという事を御言葉ははっきりと、聖書正典の末尾でまとめとして語るのです。事の始まりである『創世記』の第1章が「地は混沌であった。」

（創 1:2）と語るしかない深い「闇」（同）の中で、支離滅裂に物質が入り乱れた「混沌」との闘いで始まりながら、この世の最後の時を語る『ヨハネの黙示録』は豊かな終末の、平和に満ちた恵みの時で結ばれています。私たちの心の中に渦巻く、まさに「混沌」としか喻えようのない「闇」のようなあらゆる罪と死を、十字架によって完全に滅ぼしてくださった主イエスが、再びこの世にその御姿を現してくださることを教会は、花嫁が花婿を待つようにして、一刻も早く「来てください。」（黙 22:17）と願い祈りながら待つのです。「自分の衣を洗い清め」（同 14）て待つのです。そのように拔かりなく調べながら、あのマタイ福音書でお聞きした「賢いおとめ」（マタイ 25:1-13）のようにして、希望を持ってその時に臨めと聖書は命じます。私たちの「希望」が何故この「終末の時」にあるのかと申しますと、それはこの時に至れば玉座から主が語られる通りの、新しい天と新しい地がここに現れるからです。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく拭い取ってくださる。」（黙 21:3-4）と、「万物を新しくする」（同 5 節）約束された主が、お言葉通りに確かにこの世に、全く新しい時と場所と被造物を植えてくださるのです。

「もはや死も労苦も涙もない」そのような平和に満ちた神の国が必ず来るのだということを、主イエスは約束してくださっています。十字架の上で主が私たち全ての罪の贖いのために、非常に人間の言葉では喻えることができないほどの激しい痛みと苦しみとをこの「私」に代わって受けてくださって、陰府に降り、三日目に復活してくださったが故に、罪と死は完全に滅ぼされました。そしてその主が、天に昇られて神の右の座に着座なさったからこそ、私たち教会は終わりの時に向かって毎日礼拝をおささげしながら、「マラナタ、マラナタ」と讃美の歌声を高く響かせつつ希望を持って、何の苦しみもないその主の再臨の時を待つのです。最後の審判が開かれて神の御前に進み出るそのキリストの再臨の時に、教会がこんなに明るく希望を持って臨む事

が許されるのは、よみがえりのキリストが既に私たちの心の中に渦巻くあらゆる罪を完全に滅ぼされて、洗礼の恵みに与った者に新しい「義の衣」を着せてくださっているからです。使徒パウロが第一コリント書の中で告げているように、「最後のラッパが鳴ると共に（中略）死者は復活して朽ちない者とされ、私たちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着る時、死よ、お前のとげはどこにあるのか」（一コリ 15:52-58）と、死の「とげ」である罪に対してクリスチャンは堂々と、主の口から宣言される「この者は義である」という言葉によって勝利を与えられるのです。「蒔かれるときは卑しいもの」であったのに、「輝かしいものに復活」（同 15:43）し、「天に属するその人」、つまりキリストの「似姿」になるのです。

復活の主への申し訳ない思いや主においていかれてしまった寂しさを抱えて取り敢えず漁に出た弟子たちのことを先週私たちは主日礼拝でお聞きしました。そして今日、黙示録からお聞きするようにそのような人間の心の空模様は、再び曇ったり、霧のような憂いが射すことは一切ないと聖書は告げています。本当に爽やかさ100%で、その先は「神の幕屋が人の間にあって、神は自ら人と共にいて、その神となり、もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。」（黙 21:3-4）のですから、永遠に新しい命に満ちた新しい霊と肉で、主と共に歩めるのです。主イエスの名によって洗礼を受けて罪の赦しを授けていただいたすべての者には、裁きの座におられる主ご自身が「義である」、「正しい者である」と宣言を与えてくださるのです。そこが非常に大きな恵みの神のご慈愛であって、「大胆に恵みの座に近づこうではないか」とヘブライ書が4章16節で喜び勇んで綴っている通りなのであります。黙示録のこの恵みの御言葉を聞いていた当時の教会は、ローマ帝国からの激しい迫害のさなかにありましたから、「主よ、来たりませ」と祈り歌いながら神を讃美する礼拝をささげ続けることで、日々の苦しみも嘆きも、精神的、肉体的な重荷もすべて神の御手に委ねました。そして主の口からの「わたしはすぐに来る」という言葉を聞いて、心の底から光が射しこんでくるような励ましを受けたのです。

本当に苦しい時に人間は、「苦しい」と叫ぶことも、「魂が渴いている」と言うことも出来ないものです。心も魂も萎え果てて、助けを求める力すらない、そのような時であっても、主は私たちの嘆きに身を寄せて「渴きを覚えている者は、来るがよい。価なしに飲むがよい。」と言ってくださいます。この黙示録の言葉の源となった『イザヤ書』55章の御言葉は、本日の礼拝の招きの詞で一緒に聞きましたが、バビロン捕囚のさなかにあっても、主が民を見放さずに養い続けてくださったことを伝えています。教会は今日も、この主の愛の御腕の中に抱かれた幼な子のように、心から平安に満たされて、安心のうちに祈り合って過ごすのです。お祈りをいたします。

讃美歌 二編1番 こころを高くあげよ 主の御声に従い

献 金

頌 栄 544番

祝 祷 平和のうちにこの世へと出て行きなさい。主なる神に仕え、隣人を愛し、主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の交わりがあなたがた一同と共にあるように。 アーメン。